

「罪のイス」

私は長野県にあります松原湖バイブルキャンプ主事の鈴木聖仕と申します。  
こうして土浦めぐみ教会でともに礼拝できる恵みを心から感謝しています。

コロナ禍でありながら、こうして顔を合わせて、またインターネットを通して共に礼拝できるめぐみを心から感謝しております。皆様にできるだけ生の声をお届けすることができればと思って、本日キャンプサンデーに伺わせていただきました。いつもキャンプのために覚えてお祈りとご支援をいただき本当にありがとうございます。

松原湖バイブルキャンプと土浦めぐみ教会との共通点はこちらのJBLのVRXという黒いラインアレイのスピーカーです。松原湖バイブルキャンプは私が音響機材収集を趣味としておりましてめぐみ教会と同じスピーカーを使っております。

私は父が牧師で、牧師の息子としては、少なめの兄が二人と姉と妹と弟がいる、ちょっと変わった真ん中のアイデンティティーをもって生きてきました。6人兄弟の3男として生まれました。

中学・高校はラグビー部に所属しておりました。

今日はマタイという人を見ていきたいと思います。イエス様に出会って人生が変わった一人です。同じ話が、マルコやルカの福音書では、「レビ」という名前で書かれています。レビってというのはユダヤ人によくある名前です。日本で言えば「佐藤さんとか鈴木さん」とかです。私も鈴木ですが、今いる人口5000人未満の小海町では珍しい苗字です。鈴木さんと言えば外から来たことがわかってしまう。ほとんどの方が、6つ位の苗字です。「マタイ」というのは、レビの外国での名前です。マタイとレビは同一人物、同じ人です。

9 イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、「わたしについて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がり、イエスに従った。

1つめのポイント それは取税人マタイです。

取税人——文字通り税金取りです。税金取りと言えば聖書の中に有名人がいます。ザアカイです。その影に隠れてしまっている取税人マタイ。

でも今の税務署の職員とは違います。当時はローマ帝国という世界一大きな国の植民地でした。ローマの人々というのはとても賢い、頭がいいんです。自分たちで集めると、徴収すると、反感の原因になる。文句を言われる。だから、占領した政府が直接税金を集めるのではなくて、現地

の人の中から「取税人」という人を雇って税金を集めたんです。ここが賢いところです。取税人は、ヘブルの民族的なプライドを売ってしまった人。「祖国の裏切り者」「祖国の反逆者」です。

憎まれた理由は、それだけではありませんでした。取税人の多くは、ローマ政府が決めた税金の額よりも多くのものを上乗せして取っていた。いわゆるピンハネをしていた。でもある人はこう言っています。取税人は給料が決まっていなかったのではないか。税金の金額だけを伝えられてあとは自分でどうにかするように伝えられていた。それはどういうことかといえば、税金に上乗せした金額が給料になるよと言うことです。そうしなければ生きていくことはできない。でも人間の金に対する欲は留まることを知らない。最初はちょっとだけ、でももっと取れそうだと思うと、もう少し、弱い人間を見つければさらにとる。金持ちからは脱税の見返りに、賄賂をもらって見逃すこともあったでしょう。最悪のサイクルが始まっていきます。罪に罪を重ねていく。うそにうそを重ねていく。

きっと、マタイは取税人に好きこのんでなったわけではない。なりたくてなったわけじゃない。小さい時から私の将来の夢は取税人ですと言うなんてことはあり得ない。

家庭の事情があったのか、なんらかの事情があった。それによって仲間はずれにされ、軽蔑されて。それだとおもしろくないから、金儲けに走る。そうするとそんな自分が嫌になる。そんな悪い循環が生まれてきた。

「収税所に座っているマタイ」は、とても孤独です。私たちが生きてると孤独を感じることはありません。学校や職場で仲良くしている友達はいても、YOUTUBE やインスタの話で盛り上がる事が出来ても“孤独”を感じることもある。私もこの夏の前にSNSで本音は書けないなと思ったことがありました。こういう時、もう一つ別のアカウントを作って本音が言える場所を作るのかな。なんて思ったことがありました。

マタイが収税所に座っているとき、イエスさまは、道を歩いていました。そこに、この収税所があり、マタイが座っていた。群衆のみんなが、イエスさまを一目見ようと、町を、道を走り回っているとき、このマタイは、ただ一人、ポツリとここに座っていたんです。どうしてだと思いませんか。「おい、いっしょに行こうぜ」と声をかける人がいない。みんなといっしょじゃない。疎外感、孤独感が彼を包んでいました。

マタイは、ポツリと一人で、そこに座っていました。だれでもいい、だれでもいいからもしもひと声をかけてくれれば、自分もまたこんな仕事はいつでも放り出して、走って行って、あの中に加わりたい、とそんな風に思っていたかも知れません。ただ、だれも彼に声をかけてはくれなかった。

名前に戻ります。マルコもルカも、ちゃんとレビと呼んでいます。マタイの福音書、つまりレビ本人が記したこの福音書だけ、彼は取税人時代の「マタイ」という名で通している。そこには何ともいえない、彼の証しの歩みを感じられます。「まさしく私は、マタイだ。だれも、いっしょに行こうと言ってくれる人はいなかった。そんな私に、イエス様は近づいて、声をかけてくださった。」「いっしょに行こう。どこまでも私といっしょに行こう」取税人だから、神の子になれないんじゃないんです。だれも声をかけないようなそんな奴は、神の子になれないんじゃないんです。イエス様はそんなマタイに、そんなあなたにも「私についてきなさい。」と声をかけてくださるお方です。

これが取税人マタイです。

2つめのポイント このマタイを招かれたお方は誰でしょうか？イエス様です。

ここで、イエスさまは、自分のことを「医者」と言っています。それは、このマタイを招いて、他の取税人や罪人を招いて、イエスさまが食事を一緒にしておられた時のことです。パリサイ人たちが、批判をして言います。

11 **すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」**

実際にそういわれてもおかしくない状況だったんです。マタイも他の取税人にも、集まっていた人たちには問題がたっくさんあった。

その時、イエス様は、おっしゃいました。

12 **イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」**

ここで言っている病人は風邪を引いている人ではありません。病人とは、マタイのように孤独で、人生にさまざまな複雑な事情を抱えて病んでいる人たちのことです。この日本は、いやこの世界はそんな状態の人で溢れています。キャンプにも傷つき倒れそうな人がたくさんきます。いや奉仕者の中にも傷つき倒れそうな人がたくさんいるんです。

あなたは別ですか？“傷つき倒れそうな人”私もその一人です。

高校時代のボクのある友達がよく言われていたことがありました。それは「〇〇ちゃんって悩みなさそうだよね」「〇〇ちゃんっていつも楽しそうで悩みなんか無いみたいだね」

そしてその子はこう答えます。「そうだね」ちょっと苦笑いを浮かべながら・・・

でもね。その子には他の人が抱えきれないほどの悩みがありました。

私たちは生きてると、このマタイのように孤独だと感じる場合があります。なんで自分ばかりに問題が起きるのかと思うことがある。自分の心にある怒りを抑えきれないことがある。赦しなくても赦せないことがある。コンプレックスに押しつぶされそうになることがある。プレッシャーに押しつぶされそうになることがある。自分が嫌いでしょうがなくなるときがある。それがマタイだったんです。

じゃあ、ここに出てくるパリサイ人は、丈夫な人たちなんですか。いや違います。イエスさまは旧約聖書の預言書ホセアを引用して言います。

13 **『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。』**

どういう意味でしょうか。いけにえとは、パリサイ人のように、自分の熱心さや努力、それによって自分で手に入れた正しさに抛り頼もうとしているそんな姿です。自分の力で全てを成し遂げたそんな態度を、イエス様は好まれない。イエス様が好まれるのは憐れみです。憐れみを与えることです。

そして、この憐れみというのは、自分が病気であるという自覚のある者だけに与えられるもの

です。自分が病気であるという自覚のある者だけに与えられるものです。

あなたは本当に一人で責任を負えるほど立派ですか？

神様は自分の正しさを主張しないで、自分の孤独を否定しないで、自分の出来ないことを隠さない。素直に病んでいる自分を告白することができる者、わたしには弱さがあります。確かに問題があります。孤独を感じるがあります。と告白するものを神さまはあわれんでくださる。

私たちの中にもパリサイ人がいます。

自分が招かれている罪人であることを忘れて、罪人を招く神様の恵みがわからなくなってしまう。イエスさまは、そういう私たちに何とおっしゃったんでしょうか。「行って、学んできなさい」。私たちがどんな立派な、正しいいけにえを捧げるかということではなく、神さまの憐れみこそが私たちを救うのだということ、「行って、学んできなさい」とおっしゃっているんです。

3つめのポイント 最後です。

イエスさまが医者である限り、「処方箋」や薬があるはず。取税人マタイにとっても、パリサイ人にとっても、その病をいやすことができる、処方箋があるはず。それが、この聖書の箇所鍵となる言葉です。病んでいる私たちを癒すために医者として来られたイエスさまの処方箋、それは、9節にあります。

9 イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、「わたしについて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。

「わたしについて来なさい」です。

本当の名医であるイエスさまは、私たちがどんなに難病であっても、それを放っておくことはしないんです。いっしょに行こう、いっしょに食べよう、いっしょに生きようと招いていてくださる。それが、取税人マタイが発見した、インマヌエル「神、我らと共にあり。「神様はいつも私たちと一緒にいてくださる」のだということです。

いいですか、神様の選びは能力ではありません。神様はあなたの弱さを選ばれた。神様はあなたの罪深いところを選んでくださったんです。

人間的に見ればふさわしくないものが選ばれる。罪の中で苦しんでいた、人からのけものにされていたものが選ばれる。いじめられていた人が選ばれる。いじめていた人が選ばれる。自分の力では立つことも出来なかったものが選ばれるんです。

マタイは。罪のいすから立ち上がりました。ずっと座っていた収税所の罪のいすから立ち上がりました。

この「罪のいす」というメッセージの題は、今から20数年前に5人程の高校生がhi-b.aの町田集會に集っていた時に語られたメッセージの題です。そのスタッフは文字通り本気で命を削りながら高校生に関っていました。私が今のこの働きをしているのは、あのスタッフのおかげです。

マタイは。罪のいすから立ち上がりました。ずっと座っていた収税所の罪のいすから立ち上がりました。

いやイエス様によって立ち上がらせていただいたんです。「わたしについてきなさい」という言葉によって、自分では本当は立てない、そんなマタイの背中をイエス様が押してくださったのです。

私たちも今、座っている。その罪の椅子から立ち上がることを神様は求めておられるんです。

私たちは何度決心しても、神様あなたに従いますと何度決心しても。

数日経つとすでにその思いは弱ってってしまう。不安でいっぱいです。でも神様はあなたに今日もう一度言われます。「私についてきなさい」

あなたの力でではありません。インマヌエル「神、我らと共にいます」ということが、この「私についてきなさい」という言葉に含まれているんです。私についてきなさい。私を見なさい。私のことを考えなさい。私はあなたと共にいるから。

神様はあなたが、あなたの力で立派なクリスチャンになることを求めているのでも、あなたの力で正しい人間になることを求めているのでも、あなたの力できよい人間になることを求めているのでもありません。

そんなことは私についてくれば、全て備えるから。私にその答えのすべてがある。だからわたしについてきなさいです。私が道であり真理であり命なのです。

マタイは、「罪のイスから立ち上がって、イエス様に従った」これこそ、神様の奇跡です。そして、私たちは今年この場所で持たれる礼拝のたびに、その奇跡を味わうことができます。「私のような者が、礼拝に来ることができた。」「私のような者が、イエス様に愛されている。」「わたしのようものが赦されている。」「わたしのようものがイエス様に従っている。」「私のようなものが今日生かされている。」まさにそれが、神様のあわれみです。

神様の選びは能力ではない。神様はあなたの弱さを選ばれた。神様はあなたの罪深いところを選んでくださった。

今日もイエス様はあなたを招いておられます。「私についてきなさい」

そしてその先にあるのがイエス様の十字架です。イエス様は憐れみをもって私たちの罪と格闘し、罪を赦し贖ってくださるお方です。私たちの傷は簡単に癒されません。色々なタイミングで傷が浮き上がってきってしまう。でもイエス様についていけば、イエス様の十字架の血潮によって私たちの傷は癒されていくそのことを信じて受け取って歩んでいきたいと思えます。

祈ります。

愛する天のお父様ありがとうございます。あなたは今日も私の前を進みついてきなさいと言ってくださることを心から感謝をいたします。

そのあなたのことばに信頼して歩ませてください。それぞれの歩む場所においてみことばを握って歩ませてください。

この教会に遣わされている洪先生の歩みの内に、教会で働かれている先生の歩みの内に、信徒の方々の歩みのうちに主がともにいてください。ここに集われている一人一人を画面の向こうで捧げられている礼拝者を主が癒し、主が憐れみ、主が助けて導いてくださいますように。すべてのことをあなたの御手にお委ねして主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。  
アーメン